

松下幸之助記念志財団 研究助成
研究報告

(MS Word)

【氏名】
池田篤史【所属】(助成決定時)
株式会社メンバーズ【研究題目】
シク教の教主の肖像画に関する研究—多様性における協調と民族至上主義の狭間で—

【研究の目的】(400字程度)

2020年初頭から感染が始まった新型コロナウイルスは、グローバル化した現代のシステムを通じて全世界へと拡大した。マスクの着用や社会的距離の確保は「新しい生活様式」と呼ばれ、人々の生活を大きく変えた。一方で、オンライン化が進み、通常は対面で行われていた様々な事柄が、Zoomを初めとするビデオ会議システムによって代行されるようになり、その結果メタバースなどの仮想現実空間が注目を集めるに至っている。このようなパラダイムシフトは、海外と密接な繋がりを持ち、国内では集住したり、頻繁に会合を持ったりすることで、アイデンティティを確認しているシク教徒の移民たちに大きな影響を与えている。そこで本研究では、東京都茗荷谷と茨城県境町にコミュニティを築いている滞日シク教徒たちに焦点を当て、彼らの信仰がコロナ禍からアフターコロナ/ウィズコロナにかけてどのように変化したかを、創始者グルー・ナーナクを初めとする教主たちの肖像画などの物質文化との関わりに着目して明らかにする。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、東京茗荷谷と茨城県境町の寺院を訪問して聞き取り調査と参与観察を行った。まず、両寺院にどのような教主の肖像画が展示されているかを概観しておく。東京茗荷谷の寺院には、教祖であるグルー・ナーナクの単独肖像画はないが、第10代教主ゴービンド・シングの単独肖像画は置かれており、10人の教主たちの集団肖像画も確認できた。また、興味深いのは、礼拝の中心となる聖典の奥にはシク教の総本山であるゴールデン・templの写真が大きく飾られていた。一方、茨城県境町の寺院では、グルー・ナーナクの肖像画が聖典が安置される祈祷室に置かれており、ヒンドゥー教の神像を思わせる正面観の図像が採用されていた。なお、東京茗荷谷の寺院は間取りの関係で祈祷室などはない。続いて申請者の調査で明らかとなった最も重要な事実は、新型コロナウイルスの流行によって建物の地下に設置されていた東京茗荷谷の寺院が1年半に渡って閉鎖となり、茨城県境町の寺院に参拝者たちが移っていったことである。この人の移動に伴って、両寺院を中心とするそれぞれのコミュニティに大きな変化が起きた。第一に、東京茗荷谷の寺院は1年半の閉鎖の結果、従来は月に一度のペースで行っていた日曜礼拝を月に二度行うようになった。第二に、一般的にシク教寺院はどの宗教の信者も参拝することが認められているが、新型コロナウイルスの流行前にはシク教徒が参拝者の大多数を占めていたが、コロナ禍を経てヒンドゥー教徒の参拝者が増加した。第三に、茨城県境町の寺院は運営をめぐるいざこざで二つに分裂していたが、参拝者の増加によって対立する二つの寺院が共存できるようになり、信者によっては境町の両方の寺院に同時に入出入りする人も現れた。第四に、東京茗荷谷から茨城県境町に移った信者の一人は、コロナ禍の最中にインターネット上にシク教関連の情報を扱う日本語のサイトを立ち上げ、対外的に積極的な情報発信を行うようになった。

【結論・考察】(400字程度)

まず、前提として東京茗荷谷の寺院は警察の監視も強く、NGO という体裁を取ってはいるものの、宗教ではなく文化のカテゴリーで登録されている。教祖グルー・ナーナクの肖像画が設置されていなかったり、聖典の背後にゴールデン・templの写真が掲げられていたりするのも、宗教的なシンボルを排除して世俗的な空間を演出しようとしていることによると思われる。このような試みの中、コロナ禍で人と人との繋がりが希薄になった結果、アフターコロナ/ウィズコロナに至って寺院でリアルに集まることの意義が高まり、日曜礼拝の回数も増え、ヒンドゥー教徒さえも交流を求めて寺院を訪れるようになった。一方の茨城県境町の寺院は人

口密度の低い地区にあったため、コロナ禍でも日曜礼拝が行われており、そこに移ってきたシク教徒が民族主義的な思想を持つに至った。カルト的な思想を反映する正面観のグルー・ナーナク肖像画の存在も同様の傾向を示している。つまり、コロナ禍によって東京圏のシク教コミュニティは多文化共生と民族主義の両方の傾向を示すようになってきている。